

# 与作V I号による

## セルリーの育苗について

静岡県農業試験場園芸部

佐 田 稔

### 1. はじめに

セルリーの栽培面積並びに生産量は増加の傾向にあり、量より品質面が強く要望されるようになってきている。

温暖地では、4～5月出荷の春どり栽培の作型は、早期抽台や、す入りなどによる品質低下が若干問題となってきた。この春どり栽培の作型は、育苗期と定植後の生育初期が低温に遭遇し、生育の後半には気温が上がり、高温、長日となるなど、セルリーの花芽分化、抽台に好適な条件下で栽培されるため、早期抽台しやすく、す入りも進んで品質低下につながる。

また、定植後の活着遅延も早期抽台の1要因となっており、徒長苗などで定植後の活着がスムーズにいかないと、栄養生長が遅れ、目標とする収穫物に達しないうちに抽台が始まり、品質を低下させることになる。

したがって春どりセルリーの作型では、育苗の良否が作柄を決定するので良苗を作ることがポイントになる。

良苗作りや植傷み防止、鉢育苗が見直されてきているが、それでは鉢土は何が最もよいのかということも問題となってくる。

今回、園芸床土用資材「与作V 1号」の施用がセルリー育苗の苗質に及ぼす影響について検討し、若干の知見を得たので、ここに紹介する次第である。

### 2. 試験方法

まず、9月1日にセルリーを箱まきし、9月30日(本葉3枚)に第1回目の移植を行い、その時点から試験を開始した。

用土は沖積土(天竜川流域の灰色低地土・作土)と洪積土(三方原台地の黄色土・作土)を用い、それぞれの用土に対して容量で土2に対して与作V 1号を1、土3に対して与作V 1号を1の割合で混合し、対照区は土2に対して、パーク堆肥1として試験区を設けた。

施肥料は化成肥料のS604(16-10-14)を用い、用土10ℓ当り窒素成分で2gとFTEを1g施用混合した。

これらの混合土を34×43cm深さ6cmの育苗箱に入れ、セルリーの幼苗を5×5cmに移植し、各処理区40株を用いた。

育苗箱で25日経過して生育調査を行い、第2回目の移植を行った。第2回目の移植は箱育苗と同じ処理区でポリ鉢育苗とし、同じ混合比で鉢土を作り、4号鉢(12cm)に入れ、育苗箱で育苗した同一処理区の苗を移植し、1区20鉢とした。

第1表 与作V 1号使用によるセルリーの苗の生育状況

試 験 区	処理後25日 <sup>a)</sup> の生育(10月25日)				鉢上げ後45日 <sup>b)</sup> の生育(12月9日)					
	草 丈	葉 数	生体重	乾物重	草 丈	葉 数	生 体 重			乾物重
							地上部	地下部	合 計	
	cm	枚	g	mg	cm	枚	g	g	g	g
沖積土対照 <sup>c)</sup>	13.4	6.2	3.9	288	28.3	8.5	37.4	33.6	71.0	5.80
沖積土2 : 与作1	18.0	6.0	6.2	383	35.0	8.3	69.4	38.6	108.0	9.32
沖積土3 : 与作1	18.2	6.2	7.0	405	36.0	8.2	72.2	34.8	107.0	9.02
洪積土対照 <sup>c)</sup>	13.2	5.9	3.6	335	25.4	8.9	34.2	28.6	62.8	5.86
洪積土2 : 与作1	17.9	5.9	5.4	393	38.8	8.5	77.8	27.8	105.6	9.96
洪積土3 : 与作1	16.9	6.0	5.0	453	38.3	8.3	67.2	25.6	92.8	7.84

注 a) 第1回移植(9月30日)箱植後の日数 b) 第2回移植鉢上げ(10月25日、4号鉢)後の日数で、処理開始より通算70日となる。c) 対照区は土2:パーク堆肥1。

水分管理は移植後3～4日は、毎日朝夕2回、その後は毎日1回かん水し、各区同一管理とした。また、育苗はガラス室(最低室温15℃)内にて行った。

### 3. 試験結果

処理開始後25日(箱育苗)の生育および、鉢育苗の生育状況は第1表のとおりである。

#### (1) 処理後25日の生育状況

草丈は与作V 1号の各区は、いずれもパーク堆肥を使った対照区よりもまざっているが、土壤別および与作の混合区間では差はなかった。与作の各区はむしろ徒長ぎみの傾向であった。

生体重についても、与作V 1号の各区はいずれも、対照区よりまさり、とくに沖積土において顕著であった。与作の混合比については、はっきりした傾向がみられなかった。しかし、乾物重については、土壤別では沖積土

より洪積土がややまさり、混合比の間では2対1よりもむしろ3対1のほうがややまさっていた。

(2) 鉢上げ45日後(ポリ鉢育苗)の生育状況

草丈については与作V1号の各区は、いずれもパーク堆肥を使った対照区よりもまさっているが、写真でも見られるように、若干徒長ぎみの傾向であった。土壌別では箱育苗とは逆に洪積土がややまさっているようであるが、これも徒長によるものと思われる。また、混合比の間では、はっきりした傾向はみられなかった。

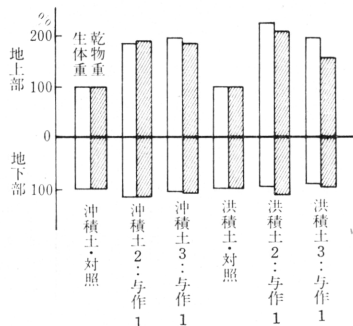
葉数は、各区间に大差はみられず、土壌別および混合比の間でもはっきりした傾向はみられなかった。

生体重および乾物重については、与作V1号の各区はいずれも対照区よりまさり、とくに、地上部において著しくまさっていた。

生体重の地下部においては対照区と与作V1号の各区间に差はみられず、また、与作の混合比間にも大差はみられなかった。しかし、土壌別では、洪積土の地下部重は、沖積土の地下部重よりかなり劣っていた。

第1図 セルリーの生体重と乾物重の対照区対比

(鉢上げ40日後の生育, 12月9日現在)



この生体重と乾物重について、対照区を100とした場合の地上部と地下部別の対比を第1図に示した。

地上部では、与作V1号の各区はいずれも、対照区のほぼ2倍近い値で、とくに洪積土の土2対与作1の区では、2倍強の値であった。

4. 考 察

以上の結果から、セルリーの育苗において、土に与作V1号を混合すると、パーク堆肥の混合に比べて、生育は良好で、苗重、乾物重ともにまさり、床土資材として実用性が高いものと思われる。土壌別では、沖積土と洪積土では、若干苗の生育に違いはみられるものの、大差はないことから、土壌の物理性、化学性を考慮して、施肥や水管理を行えばよいものと思われる。

また、与作V1号の混合比については、土2対与作1

写 真

(1)



沖積土慣行区

沖 与作V1号  
積 土2:1

沖 与作V1号  
積 土3:1

写 真

(2)



洪積土慣行区2

洪 与作V1号  
積 土2:1

洪 与作V1号  
積 土3:1

と、土3対与作1の両者では大差はみられないことから、土3に対して与作1の割合でも、有効と思われる。

6. 与作V1号を使用しての育苗上の留意点

与作混合区は若干徒長ぎみの傾向であったが、与作V1号は保水力が良い特性があるのに、対照区と同じ水管理をしたため、やや水分が多かったこと、また、4号鉢で45日も育苗し、育苗面積の都合で、鉢の間隔を広げることができなかったことに原因があった。

したがって、かん水は若干ひかえるとか、苗の生育に応じて鉢の間隔を広げることができるように、育苗面積の確保などに留意すれば、よいものと思われる。